

コラム 31ーグリスウォルドの 21 か条要求の歴史的背景

アメリカ外交史家 A. W. グリスウォルドは、21 か条要求の歴史的背景として日本の立場を支持し、次のように述べています。

「日露戦争後、日本の富強は大いに増大したが、まだ目標に到達せず朝鮮や満州の地位も完全とは言い難かった。いかに条約を結んでもロシアは依然として北方の脅威であり、英米の態度も不安の種だった。現にノックスの満州中立化計画と錦愛鉄道計画は、満州における日本の特殊地位を脅かした。中国本土の原料や資源はヨーロッパ諸国にとっては一個の投機の対象でしかなかったが、日本にとっては生きるための鮮血であった。西洋列強にとってシナの政治経済的意義は、日本にとってよりはるかに少なかった。これらの列強が戦争に没頭している今こそ、日本が事態をきちんと整える時だった。

西洋の干渉主義者達は日本が正当かつ死活的に重要な政策を遂行するのをくり返し妨害してきた。日本は満蒙と山東省の地歩を確固たらしめ、第 2 の三国干渉に抵抗せんとしたのだ。日本は近代産業国家として欠くべからざるシナの原料や経済的特権を確保せんとしたが、経済力でこれを達成できぬ日本は、政治的にこれを達成せんとした。戦後ヨーロッパの関心が解き放たれた暁、欧州列国の相談でシナとの約定がぶちこわされることがないように、日本は今のうちにシナとの約定を十分拘束力のあるものにしておきたかったのだ。これが簡単に言えば、21 か条要求の理由だった。」